

宍粟郷土会報

No. 32

43. 11. 25
兵庫県宍粟郡
山崎町

教育委員会内
宍粟郷土研究会
電話 750番

古民家の保存について

黒田 淑正

☆

昨夏、県政百年を記念して某女子大学が兵庫県縦断学術調査を行なった際、私は民俗研究班に加つて宍粟郡山崎町内一部の古民家を調査する機会があつた。短時間の調査だったが、なかでも同町鹿沢部落の岡橋惟一氏宅は、当地の高禄士族屋敷として特色があり注目をひいた。

家伝によれば同家祖先は、享保年間、本多家執事となり大坪流馬術指南役をつとめたという。いま、その屋敷構えは中門・蔵などを取りこわし、おおかたその面影を失つたが、しかし、本屋だけが、応対の間、サシキ、仏間などの室に、ほゞ当初のまゝの姿を遺存されていたのは嬉しい限りであつた。とくに、サシキと仏間南側の縁側は改造のため柱が欠けているけれども、主要な室の柱が一間ごとに配

目次

古民家の保存について	黒田 淑正 1
隨筆 樹	島下八重子 5
風月集と素練(四)	多淵 健次 7
京都洛西方面見学記	11
雑報	12

置ざれているのは、県下各地で見られるように、やはり、これが約二五〇年前ごろの古民家であることを物語つていた。

いずれにしても、西鹿沢、本鹿沢部落の武家屋敷、ならびに西新町、本町、山田町などの格調ある古い町家が伝える近世城下町の往時の姿は、大きな近代性の歩みのなかでつきつきと改変しつゝある現状を私は感慨深く眺めた次第であつた。

次に、今夏も文化財調査のため県文化財専門委員の村田治郎先生(京大名誉教授)、同じく野地脩左先生(神大名誉教授)とともに、宍粟郡波賀町を訪れる機会をもつた。調査対象は主として石造美術品と民家であつたが、とりわ

け、同町上野部落の岸元二六氏所有の家屋は、小規模ながらすでに当地方では数少なくなつた江戸時代中期の三間取り平面をもつ典型的農家だと考えられ、大いに興味があつた。そしてナンドとデイの間仕切りを土壁にした痕跡があることなども貴重な資料の発見であつた。先生方も、古民家史研究上、これが価値の高いことを力説されたのは勿論である。

その際、いま、この民家が廢屋となり、いまにも解体処分されようとする破損状態だから、この機会になんとか復元修理し、この建物を永久に残したいものだと思つた。われわれの郷土の風俗条件にしたがつて、祖先たちが造りあげた地方的創意をもつ貴重な民家だから、記念性のある建物として、せめて町内に一棟だけでも、是非保存できないものだろうか。

幸いにして、同行の岸根町長は、いち早く共鳴され、「早急に所有者と話し合い、町内の適当な場所に移築復元する努力をしたい。そして、この地方に伝承してきた昔からの生活用具・農具・運搬具・生産用具・その他の民俗資料をもこゝに保存し、郷土学習に役立てたい」と文化財保存に対する非常な意欲を示していただき、一同大いに感激したものである。

そこで、その実現への期待をこめて、ひろく郷土の者がこの際、この種の古民家の保存について考えてみる必要が

あるのではなからうかと思ふのである。

☆

明治はそう遠い昔ではない。明治の美術品ならまだ相当残っているし、建築でも一般の民家までいれると明治に建てられたものはまだまだ数限りなくある。しかし、明治時代の一流の建物となると、これはそう残つてはいない。まして、江戸時代の建築となると、完全な民家は勿論のこと改造の少ないのでもごく限られてくるのが現状である。

美術品なら持ち主は、みな大切に保存するから無くしたり、こわしたりすることはない。しかし、建築は風雨にさらされているからほつておけば次第にこわれてくる。それに実用的なものだから、不便になればこわして建て変えられてしまう。社寺のような記念性の大きいものはまだ問題は少ないが、古民家の保存の場合、いつも問題となるのはいたんでこわれてくるという構造的耐用年限と、実用性がなくなるという社会的耐用年限があることである。記念性はごく僅かで、実用性が大部分を占める一般の民家は、いなくなつたらこわして新しいものを造らなくては所有者はその負担に堪えられない。

また、生活は時代とともに進むから生活の容れものである民家も生活とともに変わつていかなくは不便で仕方がない。そこで所有者は部分修理をしようとする。ところが保存する側からいえば勝手に変えられたら保存の意味は全

くなくなつてしまふわけである。

それにもう一つ、文化財は活用しなければならぬ。ただ大切に保存していくだけではつまらない。活用ということとは、一般の人々がこれを見て、民家ならその民家によつて昔の人たちの生活を知るということである。したがつてこの種の文化財である古民家はつねに公開の役目を果たす必要性が生じてくるということである。

ところが、そこには人が任んでいる。住む人のプライバシーはやはり尊重されなければならない。

つまり、古民家を保存しようとするれば、まず生活の進展に対する改造ができない。そして、所有者のプライバシーを尊重することは極端に言えば公開の原則と相反するということである。そこに、古民家保存の最大の難点があるわけである。

しかし、一方、こうしている間にも古民家はどんどんこわされていく。もう十年もたつたら古い価値のある民家もまた明治の建築でさえもすべてなくなつてしまふだろう。「歴史的評価が確立していないから、どれを保存したらよいかわからない」など、のん気なことを言っているときではないようである。

兵庫県では、昭和四十一年度に民家調査を実施し、各市・町教育委員会の御協力で約四〇〇棟の古民家資料の収集を得た。そのうち、おもだつたものを県が第一次調査をし

たのが約一〇〇棟。さらに厳選し、価値あるものとして第二次調査をしたもの、および今後とも実施しようとするものは、あわせてもはや二十棟に満たない状態である。いうまでもなく、これらの中には明日の運命が危ぶまれているものがあるのである。

都市開発と生活改善への近代化傾向は決して否定できるものではないが、これをも失つてしまえば、私たちの、そして私たちの子孫の目からは永久に去つてしまうのである。明日ではおそすぎるのである。郷土のすぐれた文化財として誇るにたる稀少な歴史的遺産だけはなんととしても、現代に生きる私たちの大きな義務として後世に伝えたい。では、その対策としてどうすればよいのか。それは、さつそく国なり、県なり、市・町なりが、とくにこれらの重要なものについて所有者の意向を尊重しながら、まず、文化財に指定することである。そして史跡の保存と同じく国または地方自治体などによる買い上げを実施することであ

フタギの西隣

篠田タンス

電(2)一五二一



すし
仕出し
竹吉



TEL(2) 0675

仕出し は希当きくや

小沢神社、社南角
尾崎崎(2)二一九九

る。建物を土地とともに買い上げて保存すれば、おのずから公開・管理も公共的に運営維持する方向になつて、すべての難点は満足できるのではなからうか。

☆

古民家への関心は近年とみにたかまり、国が重要文化財に指定した民家数は、現在、全国で六十三件、一〇二棟に達している。それらの中には、古井徳治氏住宅（宍粟郡安富町皆河）や、箱木勇氏住宅（神戸市兵庫区山田町）のように、中世の室町時代にさかのぼる古いのが二棟だけ存在しそのほかは江戸時代以後のものばかりである。参考までに県下の国指定の住宅関係をあげると、この二棟のほかに、永徳家住宅（揖保川町新在家、江戸末期）および、明治異人館として、旧ハンター住宅（神戸市灘区青谷町一丁目、県管理）、旧ハッサム住宅（神戸市生田区中山手通五丁目相楽園内、市管理）がある。

したがって、これらと同じように、とくに優秀な古民家

について、県・市・町が保護条例により、一方的・強制的でなしに、あくまでも所有者と合意の上で指定を促進することが大切である。もちろん、指定にいたらない程度の古民家については、せめて記録保存（平面図作成、写真撮影など）の措置だけでもしたいものである。

☆

次に、民家を現地にどうしても保存できないものは、民家博物館などの施設をつくる必要がある。このような施設は、ヨーロッパ諸国では大きな発達をみているが、わが国ではまだそう発達していない。しかし最近になつて、

- 三溪園（横浜市中区本牧、市電・バス 三溪園前下車、財団法人経営）

○民家集落博物館

（豊中市服部緑地、阪急宝塚線曾根駅下車、財団法人経営）

○日本民家園

（川崎市生田、小田急バス向岡遊園地下車、財団法人経営）

○明治村

（犬山市、犬山遊園駅よりバス、電鉄経営）

○江戸村

（金沢市湯湧温泉よりすぐ、財団法人経営）

など、重要文化財指定物件以外の民家、古建造物を含めて

ひろく一般に公開する野外博物館がようやく軌道にのりはじめてきた。これは、古建築保存の点から大変重要なばかりでなく、これらが便利な場所にあり、相互の比較ができれば、そのうちに、家具・什器・その他の生活用品が収められ、当時の生活を目のあたりに見せてくれるという点でも、文化財保存の面からみて非常に喜ばしいことである。こうした野外博物館は文化的価値があるというだけでなく、ながい目でみれば、新しい観光資源として十分採算のとれるものになる筈である。民家の保存も当然、こういった方向に向かわなければならぬし、大なり小なりの規模のものを地方公共団体、あるいは財団法人組織によつて、各地にその特色を生かしてつくられるべきであろう。そして、いまほとんどなくなろうとしている古民家と民具を、このようにして集めることが今日の急務なのである。

☆

おわりになつたが、結局は民家居住者の便宜に対して十分な考慮をしなければ、ひろく一般の協力を得て民家保存の仕事すすめていくことはむずかしいといえる。そのほか、地域開発事業との密接な連繫も必要となる。これらの点について、今後、それぞれの分野の人々の協力のもとに国家的に大規模な保存事業が進められることを、多くの古民家を愛する人々とともに期待するものである。

(註、黒田さんは兵庫県教委文化課勤務)

随筆

樹

大阪 島下八重子

藤は大歳さん、柳はお総道さん、海棠は最上山と私の心の中に揺らぐふるさとの樹々は多いが、井伊文子夫人の短歌集「冬くさ」を拝見して

ふつふつと泡だつやうに白い花を浮べ

暑さを生きる 一樹あり

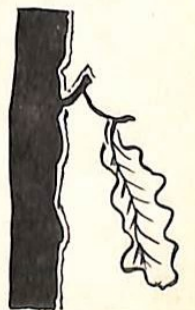
を見出でたとき、ぱあつと胸一杯拡がったのは、井上さんのさるすべりであつた。城下の名医の邸にあつたあの樹は白い花に大きな揚羽の蝶がとまったりすると、子供の目にも豪華に見えたが、後継者が無くて長い練堀さえ跡型もない今、移されて何如かで匂い咲く日をもっているであろうか。又、

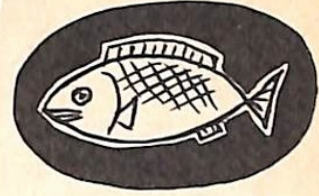
百日紅の一つ花房があつめる夕陽

いつもえはてる炎としらず

には、明源寺の庭が思い出された。たわたわとくれないによく咲いたものだつたが、「この幹の分れ目を撫でてみなさい。樹が笑うて揺れまつせ」

と、何でもおかしがる娘の私に言われた先住の声音も甦る





お食膳は生きよい鮮魚で

中村鮮魚店

山崎町中央通南店街
電話(2)二四六九

秋の土へ樹皮おとすさるすべり

ひとしきり 私もかくあらばと思いつめる

百日紅の樹皮剝落して すき透る秋に 樹こそ入りゆく

百日紅の脱皮して清すがしい樹はだ

たじろぐ私かもどかしい

と、見性志向の夫人は自由律に澄みの深さを見せておられるが、湖畔の御殿のどのあたりにその樹はあるのであろうか。

陽を浴びて堂々と金扇を撒く銀杏にさえ、自ら居を移し得ぬ嘆きはあるかもしれぬが、望郷の思いに浸るとき、必ず樹々は処を得て幻に頭つ。

穴栗橋を河東へ渡り切ったところに、友達の親類の家があつて、炭間屋ではなかつたかと思うが、積荷用にか、川べりに空地を持つていた。私の幻の樹は、半世紀前、そこに雄大な枝を拡げていた。〃兄さん〃と呼んでいた中学生が、その枝に綱をかけてブランコを作り、乗つて大きく大

きくゆすつたのを今も忘れぬ。何の樹であつたのだろうか。そんな時、樹はばらばらと実をこぼすことがあつた。中学生は陸に落ちたのは従妹や私に拾わせ、自分はざんぶと川へ飛び込んで見当をつけたあたりへもぐつて、一つ二つを拾つて来るのだつた。どうせ夏休みの遊び事、裸の子等は硬い殻を石で割つて、青くさい果肉を食べたような気がするが〃ぐるみ〃と濁つて呼んでいたのは私の記憶違いであろうか。

河東は塀の曲り処に、乗つている瓦と同じ色に焼いた鳩が置いてある家があつたりしたなつかしいところ、石屋の棗の樹と共に、清い微かな甘味を私の舌に残しているが、川岸に胡桃が生えていたのは本当だつたのだろうか。

私の知人、出雲大社町の浜村保蔵氏は、腹を立てぬが長寿の秘けつ、と島根新聞に発表し、読めと送つて下さつたが、その伯耆版に〃一本の樹にナシ・リンゴ実る〃と題して、成功した接ぎ木の妙が報せられてあつた。洋梨パールの木の台木に、ゴールデンデリシャスをついだところ、三年目に一個平均五百瓦の実が成り、甘度十五度、やわらかい玉なので、リンゴ作りの権威金沢経済大学の吉岡金市農博が、弓浜一号と名づけられたとか。それに力を得た米子市大篠津町の本地博義さんは、五年前から一本の台木に二十世紀・晩三吉・新水等の梨をつぎ、更に翌年十種類のリンゴをついだところ、昨年は二十世紀と晩三吉とパーレ

ツトの梨がみのり、今年はずぎ木した十三種のナシ・リンゴが全部実のつたそうであるから、樹は不思議なもの、直径二十センチの台木は十米四方に張った枝に、赤・青など色と形の違った実をたわわにみよらせていると、写真も載つており、宍粟の胡桃も幻ではないのかもと、少し意を強くさせる。

又日本歌人クラブ会報秋号の呼子丈太郎氏のお歌

拾い持つ黒き莢実をさいかちと教へて漢薬の用法知らずには、祖母が風呂に入れよと、からから鳴る細長い実を届けてくれたのが思い出される。体の芯が温まって、肌が美しくなると聞いたが、湯に少し泡を浮かべるので姉は厭がったけれど、私は西の河原のその樹の枝ぶりを思いながら何べんも浸ったことだった。「看護婦の注射の試験台に丁度いゝ」と医師が笑う程、私の皮膚がやわらかいのはその故為であろうか。

ふるさとの人と共に、木魂という言葉もしきりに思われるこの頃である。



風月集と素練 (四)

多 淵 健 次

追 善

上野の花見思ひ出ハ庶風子等しからまし旧き心を悟にし
ハなへてならしと春花夏鳥秋月冬雪の題に寄る

四つ五器に華や手向ん百千鳥 佐 用 馬 肝

空高く弔よ粟津の郭公

慕しや別れて移る湖の月

転ふとも雪掃拾ん苔の塚

木曾寺の廟前にて

言の葉の身にしむけふの寒哉 名古屋 素 橋

百年の枯野の道のしたハしや 同 山 甫

備祖翁牌前

香

冬かれぬ香のかほりや法の場 孤 月

花

めぐり来る日の待うけや帰り花 蝶 翠

燈 明



稲田屋
スポーツ店

山崎町 庚沢
電話(2)〇一三四

輪燈の光やさへて冬の月

仙斧

供物

吹寄よ煎餅よとて木の葉哉

阿丘

誦経

闇を消す白さや法の雪明り

素練

発願文

寛政丑のとし時雨月ハ芭蕉翁百遠忌に相当る我輩ハ其下葉の末なから今はた正灯をかゝけさらんやと同志を集て四時の祭をつとめ供物を捧て報恩に備る也けたし春は五十波山の花の陰に翁の画像をかけて茶供養ハいにしへの例にまかせ花の雲梅の星各心〱の手向とハなれる秋ハ伊保川の流に月影をうつし彼池の影をしたふ深山の時鳥にも野辺の雪見にも且その代の門生をうらやみ且今此俳諧に遊ぶを悦こふ誠に祖翁の示し給ふ俳諧は老後の樂とハ末世に我輩の記念ならずや伏て思へハ祖翁若かりし時より風雅の志厚く造化に随ひて四時を友と

し花鳥の情を感じ月雪の姿に応す見る所花にあらずと言ふことなく思ふ所月にあらずといふことなしと此道を踏分て七部集に七度の梨花を教へ給ふされと其身は風の羅になそらへ空定なき雲水の行衛しられぬ野晒しの身にしむ秋ハ心ほそかりけん夢の中なる夢を重ね松の髓の幽なる幻の住家に心を安んせんと思へと武蔵の人々に招かれてしはしハ止り給ふさすかに其所も物憂く盟の雨を聞捨て道祖の神に誘れ野中の郭公には長途の疲も忘れ給ふらんさてしも松嶋に笑ひ象潟に眠り越路の月の雨にしはれた花に明行顔馬を望る雪おかしミも淋しミも道の大悟なれハ也実にはや月花の主なから難波の浜のはま風にふし給ふ其時にあへる人々ハ見る月もかなしく思ふらめあしの枯葉の音やしのひつ皆守る夜半の更行寒さ鐘をかそへ鳥に驚きかゝる哀れを木曾寺にとゝめて一時の煙りとのほり雨とやなりけん雲とやなりけんつく〱大空をかこてともまほろしの言伝もなく暮行方の雲の脚昨日か今日となり去年か今としとなりてついに百遠忌のつもりぬ是によつて今月今日謹て香花を捧誦経奉りひそかに祖翁にもふして曰く俳諧正道のますます流布し此道を慕ふ人々永く正道を行ハんことを願ふついで我輩の一世のたのしみを窮むひとへに此恩徳山海は高深ならすいかてか我輩の是を願ハさらさらんや是を祭らさらんや

豊艸園素練

謹白

寛政子のとし十月十二日

素練に就て

1. 先に一部挙げた阿仙の叙文中の

「播陽四睡の精舎」の精舎とは現在宍粟郡山崎町の青蓮寺のことである。当時は禅宗に属した寺格の高い寺で、彼はその寺の住職として派遣されてきたらしい。彼に就ての資料文献は現在同寺に何も残っていないとのことである。

彼に就てやつと知られることは

(イ)「享二年八月十九日死亡五十九才であつた」こと。

(宍粟郷土研究会報第15所載筆者安井竹軒氏)

右の「享」とのみあるのは「享和」のミス・プリントであることは間違いないから、逆算して生年は延享元年一七七四年である。

(ロ)「四睡庵素練」と号し、また「豊艸園」とも号したこと。
(風月集による)

(ハ)「風月集」以外に「俳諧三音鳥」と名づける俳諧俳文集などの編著のあること。
(宍粟郷土研究会報第21・22号)

更に「三音鳥」によれば

(ニ) 四睡庵社中として三十名余りの直属の門下をもつていたこと。

(ホ) 彼の俳諧の師は「納涼庵南架」と号した人らしいこと。以上ぐらいであろう。

2. 素練の俳諧と俳系

私の興味を最もひくことは、彼が当時のわが国の俳壇のどの流派とどんな関連を持つていたかということである。

彼の「発願文」によつて、彼が芭蕉の俳諧に就て深い知識を持つていたこと、また祖翁としての芭蕉への敬慕の情の誠に厚いことが知られる。

恐らく芭蕉の門下を祖としたいずれかの流派に係るであろうことは言うまでもないが、その何れに属するのであるうか。

現在の俳文学研究の最高の成果によつて生まれた、明治書院刊の「俳諧大辞典」のどこにも素練に関する記述は見出せない。改造社の俳句講座

第十卷

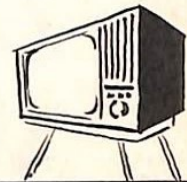
地方俳史篇の「山陽・山陰俳諧史」の中の一五八頁に「四睡庵素練」の五文字を漸く発見





ナショナル
ビクター 特約店

ハリマ電気



山崎町 鹿沢
電話 210518

するが、何の説明もなく、ただそれだけである。

当時播州加古川に住んで宗匠最高の榮譽の「花の本
(下)」の称号をもち、俳諧中興の大家の一人として当

時既に広く知られていた、松岡青蘿と何らかの關係が無
いかを考えたが、關係がないことを疑う余地がない。山崎
にごく近い林田の人で青蘿門の俳人雨人の名も、その他
の多くの青蘿門の俳人の名も風月集には見えない。たゞ
一人青蘿門で高砂の人、「布舟」の句があるのみである。

風月集の俳人の分布を見るに播州一円に亘ることは当
然ながら、仙台、武蔵、相模小田原、越後、尾張、名古
屋、三河、浪花、岡山、広島その他その広汎さに瞠目せ
ざるを得ない。

交通の要路から外れた片田舎の城下町にいて、この広範
囲からの句を集めることは容易ならぬことであり、この
事実は当時彼が相当広く名の通った宗匠であつた事を証
明するのである。

ここに注意すべきは播州以外では東武の俳人の名が多
く見られることで、素練との關係浅からざるを匂わして
いるが、今これを明らかにすることができない。

次に見逃がせないのは、名古屋の俳人蓮阿房、逸筆房
の名である。

前者は白尼と号し蓮阿坊(房)その他の別号を持つ。

父は巴雀と号する俳人での横井也有なども教を受けた
ことがあり、また天明復興期の大家加藤晝台はこの父子
に教をうけた。後者は巴雀、白尼に教を受けた俳人で、
書家としても名をなしていた。

右の巴雀は涼菟、乙由などに教を受けたから世に言う伊
勢派である。

さて素練の俳諧と俳系とを考察する唯一の根拠は今の
ところ風月集そのものである。風月集を一読して解る
ことは

概して俗談平語に過ぎ、天明俳諧中興の高峯蔗村一派か
ら「支麦の徒」とか「田舎蕉門」とか非難された低俗さ
をもっていることである。

いま遽かに断じ得ないが、どうも彼の俳系は伊勢派乃至
美濃派のように思う。

なお彼の文章は実に巧みで「三音鳥」所載の俳文の好
き「也有」の領域に迫るとさえ思われるものがある。

又彼の歌仙は、俳諧連歌の通則に正しく従っており、又

なかなか面白い処があるが、漢文の破格は少し惜しい。紙面の都合でこゝで擱筆するが、素練については今後更に究明したい。

後記

素練は余りにも世に知られなき過ぎる。今少し知られてもよきそうに思う。兎に角播州一円に多くの俳人をその傘下に擁したり、堂々京都より俳諧撰集を出版したりした事実は認められるべきであろう。

俳諧史の研究といえはいつも高い処のみ——稜線のみを追い、中腹や麓は無視されてきた。中腹や麓の研究も無意義ではなからう。これらも亦日本文化の一事実なれば、これらを合せ含めて文化の真実を示すことになるのである。

山頂だけが山そのものではないのである。

〇お断りー30号の続きの

山を出る顔また若し月の眉

はや月の影芳しや芋の露

いさよひや夕べの山に雲の脚

東月の雲かくれあり川の月

の四句を記して雪の部四十四句は紙面の都合で中略しましたことをお詫び申します。いずれ素練作品の完全

仙斧 蝶翠 阿丘 素練

な発刊を本会で計画していただきますからその節御鑑賞ください。

京都洛西方面見学記

九月二十九日（日曜）午前六時半会員参加者百二十人が二台の神姫観光バスで出発した。此日曇天で気遣われたが、追々と明るく日光を見るようになった。神戸市内は高速道路更に西宮より同じく高速道路、茨木より転向して最初に参拝したのは元宮幣大社の『水無瀬神宮』である。然し、境内は淋しかった。次に全国酒造家の信仰厚き『松尾大社』に詣でた。神殿も拜殿も光り輝いて居て活気があつた。此所で一同記念撮影をした。間もなく嵐山を眺めつゝ『天竜寺』到着。境内に駐車して選仏堂の天井の竜を見て曹源池

機用事務用品
文具・結納用品
月刊誌

ピアノ・オルガン
月賦販売



伊藤文具

山崎町中央通・TEL 2-0126代

と称せらるゝ名園を一周しつゝ観賞した。寺を辞して北へ行けば程なく『清涼寺』に着く。嵯峨天皇離宮の旧蹟で、釈迦堂として有名である。参拝を終つて嵐山に戻り、休憩所で昼飯をとる。食後渡舟橋の辺りを各自思い思いに散策した。午後は方向を転じて禅宗の大本山『妙心寺』に行く。六百年前花園天皇の勅願で創立された寺である。堂宗伽藍も多き中に、大仏堂の建物と探幽の天井竜の懇切なる説明には、一同満足して大喜びであつた。それから最後の『二条城』に着いた。此所は観光客が多く混雑していたが、豪華麗の殿舎は並べられた人形によつてその時代が偲ばれるのであつた。かくて四時に城を出て京都駅に一休みして又高速道路で帰路につき九時頃山崎へ戻つた。

雑

報

○山崎町第四回美術展は、山崎中学校体育館で十一月二日から四日まで開催。四日午後一時から各部の授賞式が挙行された。入賞者は左記のとおり。

*写真——町長賞秋田照広、議長賞志水孝子、教委賞秋田利一、神戸新聞社賞杉本博一、商工会長賞志水祐助、美術協会賞谷村登志男、ライオンズ賞秋田安利、奨励賞杉山義国。

*絵画——町長賞大野八重、議長賞中村徹、教委賞大前靖

文、神戸新聞社賞田中誠、商工会長賞杉山昇、美術賞谷口あゆみ、ライオンズ賞小倉ゆかり、奨励賞岡村幸広。

*書道——町長賞伊達友子、議長賞森田さだ子、教委賞志水宏太郎、神戸新聞社賞稲田展久、商工会長賞岩尾良子、美協賞高田一代、ライオンズ賞淡路光男、奨励賞太田了。

*工芸——町長賞加藤一子、議長賞稲沢竜暢、教委賞樽岡定二、神戸新聞社賞西川照義、商工会長賞伊藤しか、美協賞島本つや子、ライオンズ賞小寺古城、奨励賞井口隆子。

*手芸民俗——町長賞小松とし子、議長賞西川和鳳、教委賞前田寿美枝、神戸新聞社賞京増君女、商工会長賞伊藤しか、美術賞森君江、ライオンズ賞福島征美、奨励賞仲川明子。

和洋裁用品
手芸材料
ボタン 裏地

毎日手芸講習

よこすや

山崎町出水町通
電②0七四五